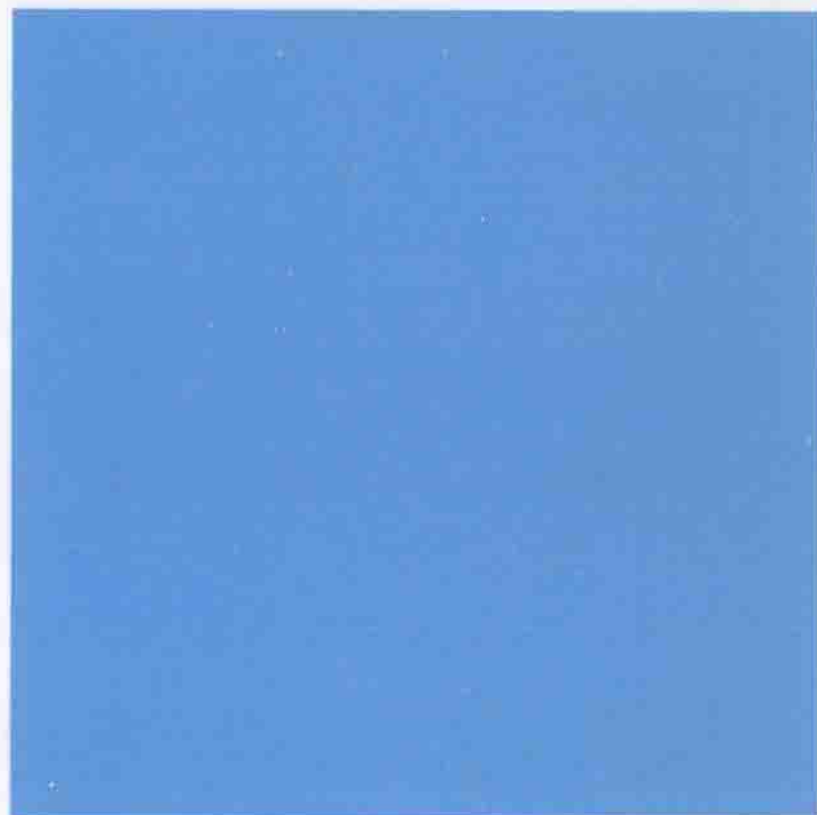


電力改革

エネルギー政策の歴史的な大転換

橘川武郎

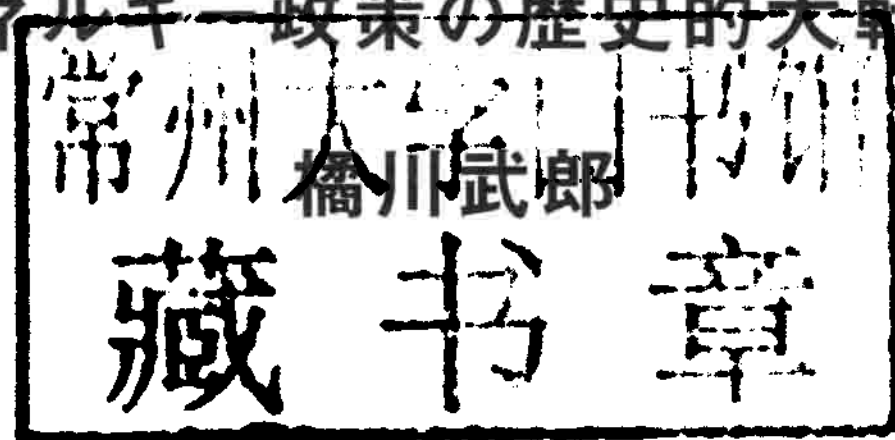


講談社現代新書

2145

電力改革

エネルギー政策の歴史的な大転換



講談社現代新書

2145

講談社現代新書 2145

電力改革——エネルギー政策の歴史的大転換

二〇一二年二月二〇日第一刷発行

著者 橘川武郎 きつかわ たけお
© Takeo Kikkawa 2012

発行者 鈴木哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二二 郵便番号 112-8001

電話 出版部 〇三―五三九五―三三二一

販売部 〇三―五三九五―五八一七

業務部 〇三―五三九五―三六一五

装幀者 中島英樹

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。〔R〕(日本複写権センター委託出版物)

複写を希望される場合は、日本複写権センター(電話〇三―三四〇一―二三八二)にご連絡ください。落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。



目次

はじめに

本書のねらいと特徴

8

第一章 リアルでポジティブな原発のたたみ方

なぜ原発を「たたむ」ことを前提にするのか／なぜ「リアルさ」「ポジティブさ」にこだわるのか／エネルギー政策見直しにおける三つの独立変数／再生可能エネルギーの拡充へ向けて／火力シフトとその問題点の解決／石炭火力発電技術の海外移転によるCO₂排出量の削減／節電の「第4の電源」としての「見える」化／二〇三〇年の電源構成の見通し／分散型電源の普及／原発ドミノ停止→産業空洞化の危機／定期検査あけ原発の再稼働には厳格な安全基準の明示が必要／いくつかの原発縮小シナリオ／歴史的文脈への注目

11

第二章 日本の電力業の歴史

日本電力業史の時期区分／日本電力業の歴史の特質／周波数分断と「電力戦」／電力国家管理の理想と現実／九電力体制の成立／九電力体制の「黄金時代」／石油ショックのトラウマと業界の変質／原子力発電の光と影／原子力「国策民営」の矛盾／頓挫した自由化と残された課題

39

第三章 電力産業体制の改革

電気料金と発展のダイナミズムへの注目／初期の電気料金／ダイナミズムの発生／競争による電気料金の低下／ダイナミズムの奔流／競争の終焉／電気料金の低位安定／ダイナミズムの調整／国家管理下の政策的低料金／ダイナミズムの閉塞／電気料金いっせいで値上げと経営基盤の確立／低廉で安定的な電気供給／自律的経営の展開／ダイナミズムの組織化／「低廉な電気供給」の終焉／自律的経営の後退／ダイナミズムの変質／電力自由化の進展／ダイナミズムの再生／電力自由化の進むべき方向／電力自由化と原子力発電／電力自由化後退の背景／発送配電分離論の台頭／発送配電分離のメリット／発送配電分離のデメリット／現場力と発送配電分離／電力

61

業の産業体制変革の方向性

第四章 電力需給構造の改革

電源構成と需要構造への注目／電灯需要中心のスタート／石炭火力中心の電源構成／東京電灯駒橋発電所のインパクト／水主火従化がもたらした変化／市場の「第一の急成長」と需要構成の変化／工場電化の進展／送配電網の拡充／集中型系統運用への移行／市場の「第二の急成長」／夏季ピークへの移行／九電力体制発足時の電源構成／電源開発の急速な進展／火主水従への転換と原子力発電の登場／油主炭従化の進行／電力流通設備の急速な拡充／電力需要の伸び悩みと産業用から民生用へのシフト／夏季ピークの先鋭化と負荷率の低下／電源立地問題の深刻化と電源三法／石油危機後の電源開発の鈍化／電源の脱石油化／原子力開発の重点的追求／LNG火力開発・海外炭火力開発の活発化／負荷率の回復／電力需給構造改革の方向性／需要サイドからのアプローチ／分散型系統運用の導入・拡充／原発依存度低下による電源構成の最適化

第五章 原子力政策の改革

原子力発電の歴史／原子力開発のスタート／日本原子力発電（株）の設立／関西電力と東京電力の先陣争い／国民的期待の理由／国論の分裂／政府と電力業界の対応／大原子力時代／原子力開発のペースダウン／原子力開発の影の側面／原子力開発の光の側面／国策民営方式による調整／原子力開発のいっそうの停滞／光の側面の強まり／原子力ルネサンス／「原子力立国計画」／東京電力・福島第一原発事故の衝撃／二〇一〇年策定の「エネルギー基本計画」の破綻／国策民営方式の矛盾／原子力発電事業の分離・国営化／ワンススルーの併用と電源開発促進税の地方移管／原子力政策の改革の方向性

第六章 求められるビジネスモデルの転換

電力産業体制・電力需給構造・原子力政策の改革の方向性／ビジネスモデルの歴史的転換／東日本大震災の被災地・釜石への注目／希望学釜石調査／釜石市の復興まちづくり基本計画／ローカル・アイデンティティに立脚した復興プラン／スマートコミュニティの実現めざして／エネルギー関連施策に関する釜石固有の条件／スマ

IoTコミュニティ形成への全国的取組み／釜石市スマートコミュニティ事業化検討
委員会の発足

おわりに

235

参照文献

238

あとがき

243

電力改革
エネルギー政策の歴史的な大転換
橘川武郎

講談社現代新書

2145

目次

はじめに

本書のねらいと特徴

8

第一章 リアルでポジティブな原発のたたみ方

11

なぜ原発を「たたむ」ことを前提にするのか／なぜ「リアルさ」「ポジティブさ」にこだわるのか／エネルギー政策見直しにおける三つの独立変数／再生可能エネルギーの拡充へ向けて／火力シフトとその問題点の解決／石炭火力発電技術の海外移転によるCO₂排出量の削減／節電の「第4の電源」としての「見える」化／二〇三〇年の電源構成の見通し／分散型電源の普及／原発ドミノ停止→産業空洞化の危機／定期検査あけ原発の再稼働には厳格な安全基準の明示が必要／いくつかの原発縮小シナリオ／歴史的文脈への注目

第二章 日本の電力業の歴史

日本電力業史の時期区分／日本電力業の歴史の特質／周波数分断と「電力戦」／電力国家管理の理想と現実／九電力体制の成立／九電力体制の「黄金時代」／石油ショックのトラウマと業界の変質／原子力発電の光と影／原子力「国策民営」の矛盾／頓挫した自由化と残された課題

第三章 電力産業体制の改革

電気料金と発展のダイナミズムへの注目／初期の電気料金／ダイナミズムの発生／競争による電気料金の低下／ダイナミズムの奔流／競争の終焉／電気料金の低位安定／ダイナミズムの調整／国家管理下の政策的低料金／ダイナミズムの閉塞／電気料金いっせいで値上げと経営基盤の確立／低廉で安定的な電気供給／自律的経営の展開／ダイナミズムの組織化／「低廉な電気供給」の終焉／自律的経営の後退／ダイナミズムの変質／電力自由化の進展／ダイナミズムの再生／電力自由化の進むべき方向／電力自由化と原子力発電／電力自由化後退の背景／発送配電分離論の台頭／発送配電分離のメリット／発送配電分離のデメリット／現場力と発送配電分離／電力

業の産業体制変革の方向性

第四章 電力需給構造の改革

電源構成と需要構造への注目／電灯需要中心のスタート／石炭火力中心の電源構成／東京電灯駒橋発電所のインパクト／水主火従化がもたらした変化／市場の「第一の急成長」と需要構成の変化／工場電化の進展／送配電網の拡充／集中型系統運用への移行／市場の「第二の急成長」／夏季ピークへの移行／九電力体制発足時の電源構成／電源開発の急速な進展／火主水従への転換と原子力発電の登場／油主炭従化の進行／電力流通設備の急速な拡充／電力需要の伸び悩みと産業用から民生用へのシフト／夏季ピークの先鋭化と負荷率の低下／電源立地問題の深刻化と電源三法／石油危機後の電源開発の鈍化／電源の脱石油化／原子力開発の重点的追求／LNG火力開発・海外炭火力開発の活発化／負荷率の回復／電力需給構造改革の方向性／需要サイドからのアプローチ／分散型系統運用の導入・拡充／原発依存度低下による電源構成の最適化

第五章 原子力政策の改革

原子力発電の歴史／原子力開発のスタート／日本原子力発電（株）の設立／関西電力と東京電力の先陣争い／国民的期待の理由／国論の分裂／政府と電力業界の対応／大原子力時代／原子力開発のペースダウン／原子力開発の影の側面／原子力開発の光の側面／国策民営方式による調整／原子力開発のいっそうの停滞／光の側面の強まり／原子力ルネサンス／「原子力立国計画」／東京電力・福島第一原発事故の衝撃／二〇一〇年策定の「エネルギー基本計画」の破綻／国策民営方式の矛盾／原子力発電事業の分離・国営化／ワンススルーの併用と電源開発促進税の地方移管／原子力政策の改革の方向性

第六章 求められるビジネスモデルの転換

電力産業体制・電力需給構造・原子力政策の改革の方向性／ビジネスモデルの歴史的転換／東日本大震災の被災地・釜石への注目／希望学釜石調査／釜石市の復興まちづくり基本計画／ローカル・アイデンティティに立脚した復興プラン／スマートコミュニティの実現めざして／エネルギー関連施策に関する釜石固有の条件／スマ

IoTコミュニティ形成への全国的取組み／釜石市スマートコミュニティ事業化検討
委員会の発足

おわりに

235

参照文献

238

あとがき

243

はじめに

本書のねらいと特徴

二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災にともなう東京電力・福島第一原子力発電所の事故を契機にして、日本では、エネルギー政策が根本的に見直されることになった。福島第一原発の事故によって、二〇二〇年までに九基、二〇三〇年までに少なくとも一四基の原子力発電設備を新增設するとした二〇一〇年策定の「エネルギー基本計画」(閣議決定)が破綻したことは、誰の目にも明らかである。

エネルギー政策全体の見直しが進むなかで、電力業や原子力政策の改革についての国民的関心が、かつてなく高まっている。あれだけの事故を起こした以上、電力業や原子力政策のあり方が、これまでのままであつて良いはずはない。一方で、国や東京電力の責任を糾弾しているだけでは、建設的な改革は実現されない。本書のねらいは、電力改革や原子力改革の方向性をポジティブな(積極的な)形で明らかにすることにある。

一般的に言つて、特定の産業や企業が直面する深刻な問題を根底的に解決しようとするときには、どんなに「立派な理念」や「正しい理論」を掲げて、それを、その産業や企業がおかれた歴史的文脈（コンテクスト）のなかにあてはめて適用しなければ、効果をあげることができない。また、問題解決のためには多大な活力を必要とするが、それが生み出される根拠となるのは、当該産業や当該企業が内包している発展のダイナミズムである。ただし、このダイナミズムは、多くの場合、潜在化しており、それを析出するためには、その産業や企業の長期間にわたる変遷を濃密に観察することから出発しなければならぬ。観察から出発して発展のダイナミズムを把握することができれば、それに準拠して問題解決に必要な活力を獲得する道筋がみえてくる、そしてさらには、その活力をコンテクストにあてはめ、適切な理念や理論と結びつけて、問題解決を現実化する道筋も展望しうる、……これが、応用経営史の考え方である。

本書の特徴は、この応用経営史の手法を採用することにある。①日本の電力業の産業体制をいかに改革すべきか、②電力の需給構造をいかに改革すべきか、③原子力に関する政策をいかに改革すべきか、……これら三つのテーマについて、本書では、長期間にわたる変遷を濃密に観察することから出発し、発展のダイナミズムを析出して、あるべき改革を